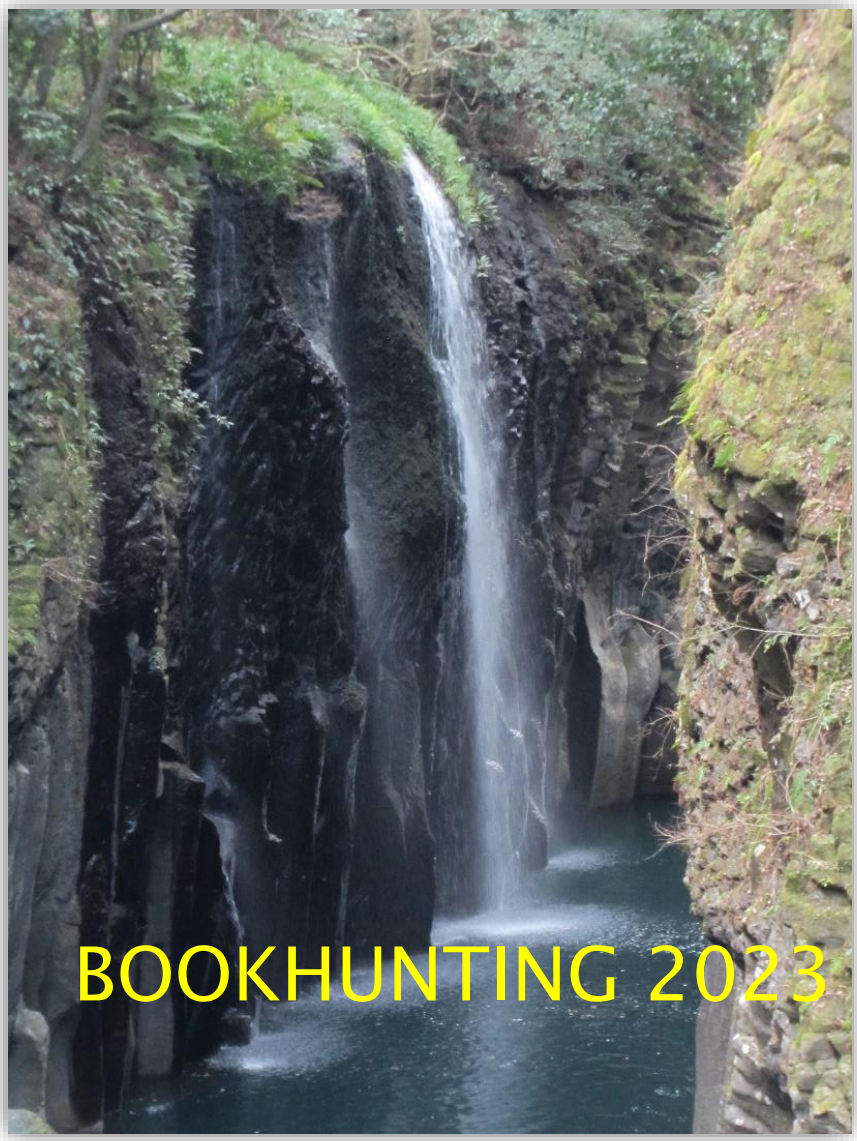
図書館だより

AUG.2023
No.93



高千穂峡（宮崎県高千穂町）
撮影：友安一夫

独立行政法人国立高等専門学校機構
都城工業高等専門学校
National Institute of Technology(KOSEN), Miyakonojo College

目　　次

「読書と私」　校　長　田村　隆弘　1

「風が吹けば桶屋が儲かる　～読書のバタフライエフェクト～」
図書館長　友安　一夫　3

「夢中になった本、これから読んでみたい本」
電気情報工学科　川﨑　剛輝　6

「私の中で生きている」　電気情報工学科　小玉　昂史　8

「学生のみなさんにおすすめする本」　建築学科　冨久　亜以　１０

「今の自分に繋がる図書体験」　建築学科　牟田　諒太　１２

「１冊の本との出会いから」　一般科目理科（数学）　久保田　翔大　１４

「私の数学の本とのかかわり方」　一般科目理科（数学）　東根　一樹　１６

「手にとって本を読むということ」　一般科目文科（哲学）　高畑　菜子　１７

ＢＯＯＫ ＨＵＮＴＩＮＧ ２０２３
学生図書委員からブックハンティング図書の紹介　１９

トピックス・編集後記　２３

「読書と私」

校　長　　田村　隆弘

人生で最初の本との出会いとして思いつくのは、小人の靴屋。人知れず夜中に靴を作る小人の姿を尊いと教えたかったのは母親のストラテジーだろう。そして、青年期の入り口での運命的な出会いは、司馬遼太郎の「龍馬が行く」。一人の男がこの国の歴史を変える、そんなことできるのかと思いながら、読み進むうちに自らが坂本龍馬になっていた。

歴史小説は、今でも睡眠薬代わりに愛用している。司馬遼太郎はもとより、山岡荘八、吉川英治、藤沢昇平、吉村昭、山本周五郎等々、素晴らしい作家は枚挙にいとまがない。今は、山岡荘八の徳川家康（全26巻）が枕元にある。毎晩、横になって2-3ページも読めば、もう瞼の筋力は栞を挟んで蛍光灯の紐を引くルーチンに付き合うくらいにしか残っていない。

歴史家は、歴史小説によって歴史を曲解してはいけないと主張する。確かに、史実は正しく伝える必要があるし、何が正しいかを判断する場合には、当時の価値観を理解せずに語ってはいけない。ただ、優れた歴史小説家は、史実を物語にして、平和への道程を訴えようとしている。

人類の歴史を紐解く科学的な著書として、ジャレド・ダイアモンドの「銃・病原菌・鉄」がある。ヨーロッパ人が他の大陸を征服できた３つの要因をタイトルにしている。この本に限らず人類が地球環境の変化や病原菌と闘い、人間同士で戦争を繰り返していることも、歴史を学ぶ中で確認できる。そして、今まさに我々はそれらを同時に体験している。

ドキュメンタリー映画化された「夜と霧」は、著者のヴィクトール・フランクルが、ナチスドイツの強制収容所で見た地獄の様を、実体験に基づいて書き上げた記録である。戦争によって人間が組織的に人間性を崩壊させていく姿を、彼は

赤裸々に描き上げている。平和な時代を維持することの大切さを、戦争が起きてから気づく様ではいけない。と、こうした名著を読むと、つくづく感じる。

素晴らしい詩や俳句が、読み手の瞼に見事に情景をイメージさせるように、素晴らしい本も“読者をその世界に引き込む”。ただ文字が整然と並んでいるのでは無く、綴られた言葉から時空や景色が浮かび上がり、行間にもその場面の匂いや温度が感じられる。

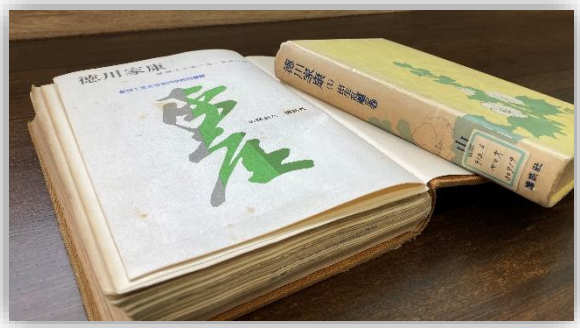
人生において、誰と出会うかは、色々な意味において大切だ。同じように本との出会いは、作者との出会いであり、時として生き方が変わるきっかけにもなる。最近、孫達にも良著に出会ってもらいたいと、書架に自分の気に入った本を並べている。（家を守る妻（バァバ）は、「読むかいね。じゃま邪魔。」と笑うが。）これも冒頭に紹介した母親との出会いの影響だろう。

山岡荘八『徳川家康』→

配架場所：閉架書庫

請求記号：913.6||ﾔﾏｵ

山岡荘八著『徳川家康』は、＜出生乱離の巻＞から<立命往生の巻>まで全 26 巻から成ります。かつてギネスブックに「世界最長の小説」として認定されていたほどの大作です。第 2 回（1968 年）吉川英治文学賞受賞作品。



←V. フランクル『夜と霧』

配架場所：書架番号 30

請求記号：946||Fra

精神科医ヴィクトール・フランクルが、ナチス・ドイツの強制収容所に囚われたみずからの体験をつづり、極限状況におかれた人間の尊厳の姿を余すところなく描いた『夜と霧』。世紀をこえ、世代をこえて、読み返され、読みつがれています。（紀伊國屋書店 HP より抜粋）

風が吹けば桶屋が儲かる
～読書のバタフライエフェクト～

図書館長　　友安　一夫

図書館だよりに寄稿したのは今から24年前、私が新任教員として都城高専に赴任したときのことです。私が赴任したときの新任教員は私を含め2人でしたが、今回は新任教員の先生方が7名もおられ、今号の紙面は賑やかな図書館だよりとなりました。ちなみに、私が寄稿した24年前の図書館だよりは、宮部みゆきの「龍は眠る」の紹介文でした。ちょっと横道にそれますが、都城高専に赴任する前、本の虫の後輩から宮部みゆきを勧められました。その中でも「龍は眠る」を推され、読んでみました。「龍は眠る」から宮部みゆきワールドに入ったのが良かったのでしょうか。当時文庫化されていた宮部みゆきの著作を順次読み倒していったほどです。24年前、この感動をどうしても伝えたく図書館だよりの寄稿文として提出したことを今でも覚えています。

さて、今回は図書館長として24年ぶりに「図書館だより」に寄稿する機会を頂きました。私自身は本の虫まではいきませんが、本好きではあります。話は長くなりますが、少し昔話をしてみたいと思います。私が高校生のときというと随分昔のことですが、高校時代で印象に残っている授業の一つに高校2年次の現代文の授業が挙げられます。その授業では毎回B4版のプリントを3、4枚刷って来られていました。大抵、何かの短編小説がぎっしり印刷されており、「まずは読みなさい。」と言われて授業が始まるといったある意味風変わりな授業でした。その一方、教科書の解説では「まあこんな感じでしょうか？」、としばしば適当に切り上げられていました。ただ、その先生が妙にまじめに授業に取り組まれていたのが夏目漱石の「こころ」でした。何回かの授業で滔々と解説され、「こころ」の最後の授業で先生が次のようなことを話されました。「皆さんは、赤川次郎[1]あたりをよく読まれるのでしょう。確かに読みやすい小説です。ただ、赤川次郎といえども、日本の文学、海外の文学で名著と言われるものは一通り読んでいるのです。皆さんにそこまでは求めませんが、ただ、日本人なら夏目漱石は読むべきです。」と話され、「こころ」の授業を締められました。このとき、何故だか先生から挑戦状を突き付けられた気がした私は、「じゃあ読んでみよう。」と夏目漱石の作品を高校2年生のときでしたが、全

て読破しました。ただ、読んで見たものの私のような単純な人間には人の細やかなこころの機微の変化を文章から深く読み取る能力は当時も今もなく、確かに読み物としては面白いけれども、夏目漱石の文学が内包するであろう、特にその先生が「日本人であれば読むべき」とまで言われた本質を当時も今も、深くは理解できていない状況です。

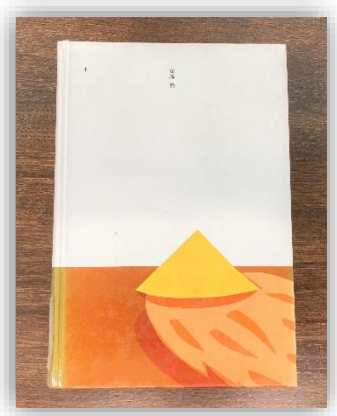
夏目漱石の世界観を理解するには至ってはいないものの、夏目漱石の世界をほんのちょっと覗いてみたことのある私なのです。そんな私なのですが、数年前に本屋で物色しているとある帯がしてある本に目が留まりました。その帯には、「漱石をして『余の娘が年頃になって、音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと言い募る時分になったら、余は是非この「土」を読ましたいと思っている。』と言わしめた農民文学の最高峰」というキャッチコピーが書かれていました。タイトルは「土」、著者は正岡子規の門人であった長塚節という人でした。本のあらすじを見たところ、どうも明治時代の農村を描いた文学作品らしいのですが、なかなか読み応えがありそうで途中で挫折してしまいそうな気がして、その時は「土」を手に取ることはしませんでした。その後しばらくすると、キャッチコピーの帯が付いた「土」を書店で見かけなくなり、見かけなくなると何故か気になってしまうのが人情でしょうか。ついにその「土」を手に取って読み始めました。明治時代の茨城県の農村が舞台なのですが、当時の厳しい生活の情景、ただただ貧しい農村の生活が行間を通して溢れてくるのです。山口県の片田舎が郷里の私には心象風景として「土」に描かれた明治時代の貧しい農村の舞台が実感として理解できたからなのかもしれません。小説の内容自体は日々の日常を淡々とつづったものでしたが、その圧倒的な描写は私を虜にしました。漱石をして絶賛した理由がこの時ばかりは私にも理解できた気がしました。

この「土」ですが、私の記憶に残る良書の一つです。その一方で、面白いからという理由では学生の皆さんにはお勧めできない本です。読んでいて、ただただ苦しいのです。その一方で茨城の農村の風景が行間から溢れ出るのです。自然の厳しさをありのまま、精細に記述したがために溢れ出てくるのです。「土」を読むことで、ほんの少し前、それこそ100年余り前の時代へタイムスリップしたような感覚に陥れるかもしれません。

「風が吹けば桶屋が儲かる」という言葉がありますが、高校2年生の時に教わった現代文の先生の一言から、夏目漱石の世界に浸り、そしてかなりの時間が経過した後、この「土」に辿り着きました。昨今、ポストコロナの時代に突入し、ChatGPTに代表されるように人類の進化は止めどなく加速度的に遷り変っていく様相を呈しています。その一方、ウクライナ戦争、異常気象の頻発、ついには地球温暖化という言葉では収まりきらない地球沸騰化という不穏、混沌とした雰囲気を感じざるを得ない今日この頃、この「土」を学生の皆さんに紹介したいと思ったのです。我々

は便利な世の中に生きているような気がしますが、よくよく考えるとこの「土」の世界と現代は実は紙一重なのかもしれません。たまには良書からにじむ「苦み」を読書で味わってみるのも長い夏休みの一興かもしれません。

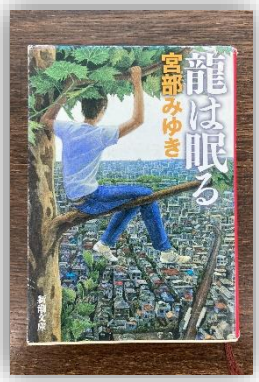
(1)赤川次郎は私が高校生当時、多分一番の人気ミステリー作家でした。昨今でいえば東野圭吾さんあたりでしょうか？



↑**長塚節『土』**
書架番号 25
請求記号 913.6||ﾅｶﾞ||48859
解説を含めると 635 ページにもわたる大作です。

↑**夏目漱石『三四郎』**
書架番号 18（ほか 2 作品も）
請求記号 913.6||ﾅﾂ||S1393
夏目漱石『それから』
請求記号 913.6||ﾅﾂ||
夏目漱石『門』
請求記号 913.6||ﾅﾂ||

↑**夏目漱石『こころ』**
友安先生私物
夏目漱石の作品は多くの蔵書があります。全集は閉架に所蔵していますので、読んでみたい方は図書館カウンターへお声掛けください。



↑**宮部みゆき『龍は眠る』**
友安先生私物
宮部みゆきの作品もたくさん所蔵しています。長編作品も多く、この夏読書に没頭してみたい方、手に取ってみませんか。

夢中になった本、これから読んでみたい本

電気情報工学科　　川﨑　剛輝

本年度より、本校電気情報工学科へ着任しました川﨑剛輝です。2011 年に都城高専 電気情報工学科に入学しまして、2018 年に本校専攻科を修了しました。九州大学大学院に進学後、トヨタ自動車九州㈱で３年ほど勤務しまして、本校へ着任しました。母校に教員として戻ってくることになるとは学生時代は考えもしていませんでした。学生時代を振り返ると、じっとしていることが嫌いで本を読むことより部活や課外活動などに注力していたため、本校図書館を利用したことは数えるほどしかったと思います。ただ稀に、この本ちょっと読んでみようかなといった軽い気持ちで読み始め、面白いと思えば一気に読んでしまうこともありました。そんな私が、本について紹介するなんてとは思いましたが、その中でも特に熱中して読んだ本やこれから読んでみたい本について簡単に紹介させていただきます。

〇これまで読んだ中で夢中になった本

『不思議の国のトムキンス』

この本は、物理現象を実世界で分かりやすく表現させるために、主人公が夢の中で『光速が遅い世界』に行き、時間の遅れを体験するなど物理現象をイメージしやすいように身近なものに例えられています。物理学が苦手な人でも現象を簡単にイメージして読むことができる本ではないかと私は思っております。社会人時代にこの本と出会い、最寄り駅から博多駅まで移動する際に読んでいたのですが、熱中して乗り過ごしました。

〇これから読んでみたい本

『豊田章男の覚悟』

これから自動車は 100 年に一度の大変革期を迎え、ガソリンから EV や水素自動車など形態の変化だけでなく、自動車への価値観が大きく変わろうとしています。そんな中、自動車会社のトップに立っている方がどんな考えを持ち、なぜそ

のような行動をしたのか、しようとしたのかなどを深堀りすることで、これからの私の人生の中でも参考になることは大きくあると思い、ぜひ読みたいなと考えています。（自分がトヨタに勤めていたからというのもありますが・・・）

　これからの学生生活の中で本と触れ合う機会は、自ら行動しなければなかなかないとは思いますが、少しでも興味のある本がもしあれば、最初のさわりだけでも読んでみてはどうでしょう。私もこれから本を読む機会をさらに作っていこうと思います。

← **G.ガモフ**
『不思議の国のトムキンス』
川﨑先生私物
川﨑先生にご紹介いただいたトムキンスシリーズの中の１冊が図書館にも所蔵されています。
G.ガモフ『トムキンスの冒険』
配架場所：書架番号４
請求記号：404||Gam||65322

← **（左）トヨタ生産方式を考える会 編**
『トコトンやさしいトヨタ生産方式の本』
配架場所：書架番号９
請求記号：509.6||ﾄﾖﾀ||
（右）片山修『トヨタはいかにして「最強の車」をつくったか』
配架場所：書架番号１１
請求記号：537.92||ｶﾀﾔ||65280
残念ながら豊田章男に関する蔵書がなかったので、トヨタに関する蔵書を紹介します。

私の中で生きている

電気情報工学科　　小玉　昂史

2023年２月から着任しました小玉昂史（たかふみ）と申します。私も都城高専の出身です。私が居たころからこの「図書館だより」はあって、何気なく先生方の文章を読んでいたのが記憶に残っています。今度は「私が」どんな話をできるのか…と不安な気持ちもありますが、少しだけお付き合いいただければと思います。記憶に残る本はいろいろとありますが、せっかくなので私が子どもの頃に出会った思い出の本の紹介をさせてください。

私の母は昔本屋で働いており、その流れで小学校等での読み聞かせも行っておりました。私に物心がつく頃には、当たり前のように本が家にたくさんあって、母の読み聞かせの練習に付き合うだけでなく、自分からも絵本やこどもの科学の本などをよく読んでいたのを覚えています。

母の読み聞かせの中でも特に印象に残っている話があります。私が小学校に入ったばかりの頃、母がいつものように本を持ってきて、そしていつもと違って本を母自身の顔の前に開きました。「絵本じゃないの？」と聞くと、「今日は寝る前だから、目をつぶってお話だけ聞いてね。」と、母はまぶたが重くなった私の方を見て言いました。私も「お話を聞きながら眠れるなんて、なんて素敵なんだろう！」と思いながら目を閉じ、母の声を頼りに、頭の中で登場人物たちに動いてもらうことにしました。しかし、母が選んだ本は私にとって「聞きながら眠れる本」ではなかったのです。

「よだかは、実にみにくい鳥です。」

一瞬で物語の世界に引き込む母の声が頭の中に響き、主人公の「よだか」が現れました。醜い姿のよだかに動物たちが暴言を吐き、本物の鷹からは「名前を変えなければ殺す」とまで言われています。それでも私には、悲しみながら夜空を飛ぶよだかの姿がなぜか美しく見えました。でもよだか自身は、自分の「食事」のために殺した虫たちと、今から理不尽に殺されるかもしれない自分を重ねて泣き始めるのです。

「僕はもう虫を食べないで飢えて死のう。いや、その前に僕は遠くの遠くの

空の向こうに行ってしまおう。」

辛い現実から逃れて、それでも最期を美しく飾りたいと、よだかは自分の命を天で燃やそうとします。よだかが星座たちに「死んでもかまわないから私をあなたのところへ連れて行ってくれ」と頼みますが誰も聞いてくれません。そうして誰からも見捨てられたよだかは、最期の力を振り絞って「自分の力で」天まで昇り、満足そうな顔で息絶えます。そのときの命の光が、青い美しい光になって、今でもまだ燃え続けているそうです。

物語が終わると私の涙は止まらなくなっていました。「悲しい」なのか、「よかった」なのか、一言で収まらない感情が私の心をぐちゃぐちゃとかき混ぜて、その感情が、私の意志とは関係なくどんどん頬を伝っていくのです。読み終えた本から私の顔に視線を移した母が、ぐしゃぐしゃの顔を見て驚き、すぐに謝りました。でも嫌ではなかったんです。この涙はこの作品が素晴らしいから出ているのだと、子どもながらに思いました。だから母には謝ってほしくなかったんです。この物語を教えてくれたことを誇ってほしかったんです。

そのあとの記憶は曖昧ですが、後日、この素晴らしい物語をクラスのみんなにも伝えたいと思い、小学校の先生に「宮沢賢治の『よだかの星』を（紙で作った）人形劇でみんなに聞かせたい」と提案しました。私が物語を読んで、それに合わせて友だちに人形を動かしてもらう。私の頭の中で上映されていたものが、自分と仲間の手によって、実際にみんなの目に触れる。実際、よだかの星は低学年生がやるような劇ではないのですが、見てくれた友だちは、感動して、私と同じように泣いてくれました。この物語はそんな素敵な経験にも繋がっています。短編小説ではありますが、この小さな作品は確かに私を形作る「何か」へと変わったのです。（短いお話なのでみなさんもぜひ読んでみてください。）

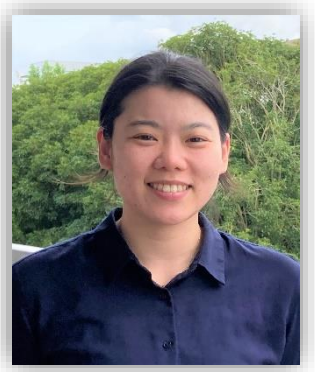
私は本が与えてくれる経験が好きです。自分の頭の中で動いてくれた登場人物たちは、ずっと昔に出会っていても、ずっと私の中の片隅に居続けてくれて、こころに残る「経験」として自分の中に残っています。私は漫画やゲーム、アニメなんかも好きで、いまでは本をあまり読まなくなって、こういった映像付きの作品ばかりを楽しむようになってしまいました。映像のついたこれらの作品との出会いも、もちろん素敵なものばかりです。でも、本のように、自分の頭の中に登場人物を招いて得られる出会いは、ほかにはない特別な何かをもたらしてくれるのだと思います。そして、そんな出会いをまた経験したいなと、本との思い出を振り返りながら思いました。

本当は話したいことがいろいろとあったのですが、長くなってしまったのでまた別の機会にでも。私と同じように本から離れてしまった皆さんも、自分を形作る本との出会いの機会、たまには作ってみてはいかがでしょうか。

学生のみなさんにおすすめする本

建築学科　　冨久　亜以

建築学生へおすすめする本



こちらに紹介しますのは、実際に設計されている建築家たちも読む雑誌や本ですので、学生の内から、「良い建築」に触れる機会となるかと思います。ぜひ日常的に目にするようにしてください。

ただし、あくまでも雑誌などは注目されなければならないので、必ずしも「良い建築」かどうか批判的視点（自分だったらもっとこうしたら「良い」と思う、ここは自分の設計にも活かしていきたい。という視点）を持って読むようにすると自分自身の伸びしろにつながると思います。

⓪各建築家の出版している図集や建築家の出版している本
①新建築
②住宅特集
③建築知識
④ディテール
⑤商業建築

建築学生以外の学科を問わずおすすめする本

こちらは、建築的要素も含まれていますが、一般教養的側面を持っています。マニアックなものを、わかりやすく写真いっぱいで紹介してくれている雑誌です。特に、①と②は、カフェやレストランなども紹介していたりするので、旅行などの計画を立てるときにも役立つような情報が掲載されています。

①カーサブルータス
②各都道府県別建築ＭＡＰ
③ＴＲＡＮＳＩＴ（トランジット）

一歩踏み込んで

学生の時に「社会人的」要素や知識を付けるときに役立つかもしれませんのでおすすめする本で、「＊著者名：本のタイトル」として紹介します。

＊坂口恭平：独裁国家のつくりかた、自分の薬をつくる
＊斎藤孝：大人の語彙力ノート
＊ユヴェル・ノア・ハラリ：サピエンス全史
＊マーク・ピーターセン：日本人の英語
＊ごく普通の外国人　がっちゃん：がっちゃん英語　キミに読ませたくて創った文法本
＊スティーブン・R・コヴィー：７つの習慣

建築学科推薦図書コーナー
こちらのコーナー以外にも多くの図集が所蔵されています。
大きな本が多いので、まずは館内で眺めてみてはいかがでしょうか。

（左）『７つの習慣』
配架場所：書架番号２
請求記号：159||Cov||63200
（右）『日本人の英語』
配架場所：閉架書庫 2F
請求記号：835||Pet||S7978

今の自分に繋がる図書体験

建築学科　　牟田　諒太

本年度より建築学科助教として着任しました牟田諒太と申します。「図書館だより」ということで図書に関して何か書きたいと考えましたが、これまであまり読書をしてきていないので書くことがなく困っています。研究では、多くの専門書や参考書を見てきましたので、そのことについて書きたいと思います。

私は、大学時代、レポート作成や勉強などで頻繁に大学の図書館に通っていました。本はあまり読みませんが、図書館の雰囲気は好きです。大学で研究をするにつれて、専門書や参考書を多く読む機会が増えました。

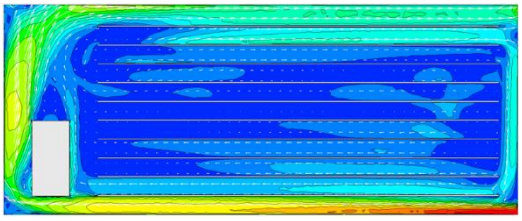
都城高専の高学年の皆さんは、卒業研究などで専門書や参考書を読む機会も増えたと思います。最初に専門書等を見ると難しすぎて読む気も失せることがあると思います。私もいろいろな専門書・参考書を見てきて何度も読むのを諦めましたが、中には、読者にとても分かりやすくイメージさせてくれるものもあります。今回、紹介する本（参考書ですが）は、私の研究を始めるにあたってとてもイメージしやすく役に立ったものです。

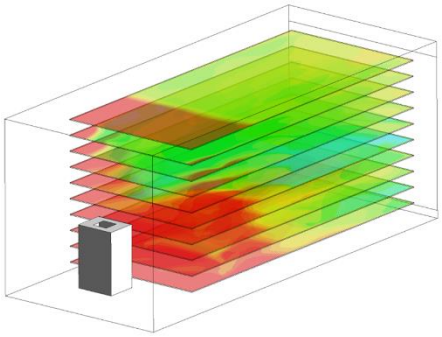
私は、室内環境を対象とした数値シミュレーションを行っています。そのシミュレーション手法を Computational Fluid Dynamics（CFD）と呼びます。CFD 解析は、コンピューターシミュレーションを用いて流体に関する運動方程式を解き、空気の流れや温度の分布状況の可視化を行える手法であり、私が研究する建築分野でも幅広く使用される解析手法です。流体に関する運動方程式は複雑なものが多く、初めて勉強する人にとっては理解しがたいことばかりです。私は、本書を読むことで、CFD 解析とは、どのような解析方法で何ができるのかを大まかにイメージすることができ、現在の研究に大いに役立っています。大まかなイメージができたのちに、専門的な勉強することで理解が進みました。

今回は、私の研究に関する参考書を一例としてあげたのでお勧め図書としてはあまり皆さんの興味のでるものではないかもしれませんが、皆さんが興味のある分野でも初心者が理解しやすい参考書が探せばあると思います。

学生の皆さんは、勉強・研究に躓いたら、図書館にある専門書を探してみたり、その分野の専門の先生にわかりやすい専門書はないかなど尋ねてみるといいと

思います。





大規模コンテナ内部で過酸化水素蒸気（VHP）を用いた除染を行う際に、どのようにVHP 発生装置を配置するのが効率的かを CFD 解析で検討した一例です。左図が空気の流れの断面図、右図が VHP 吸着分布の計算結果です。CFD 解析では結果を分かりやすく視覚的にとらえることができます。

＜推薦する図書＞
空気調和・衛生工学会　編
『ＣＦＤガイドブック―はじめての環境・設備設計シミュレーション』
オーム社　　ISBN　9784274221538
https://www.ohmsha.co.jp/book/9784274221538/

せ か い の と し ょ か ん

「RETRIP」より by coriander27

「RETRIP」より by coriander27

ストラホフ修道院図書館（チェコ）
（左）哲学の間　　（右）神学の間

１冊の本との出会いから

一般科目理科（数学）　久保田　翔大

都城高専のみなさま。初めまして。

一般科目理科の数学科の教員として着任いたしました久保田翔大（くぼたしょうだい）と申します。読書とはほとんど関わりがなかった私なのですが、そんな私でも読むことに没頭した本がありましたので、そちらをご紹介いたします。

読書と関わりがないと言いましたがどれくらいなかったかと言いますと、学校の宿題として課される読書感想文作成時に本を読むくらいで、他には漫画等を読むぐらいでした。（感想文の課題で「新書を読んで感想文を書きなさい」と言われたところ、新書を本のサイズだとは思わず、「新しく出版された本」と解釈して、読書感想文発表時にクラスが笑いに包まれたのは良い思い出です。）

私には 4 歳年下の弟がおり、我が家は寝床が 1 部屋で、寝るときに母親が本を読んでくれるという習慣がありました。（もちろん当時園児だった弟向けの本です。）こちらを寝るときのラジオがわりに聴いていたのですが、母親としても私が本を読まない、活字に触れないことに関して思うところがあったのでしょう。私が小学校高学年になるとき、日本の歴史の漫画に没頭していたことから、母親が戦争に関わる本があるから次からそれを読むと言ってきました。そこで出会ったのが『アンネの日記』でした。

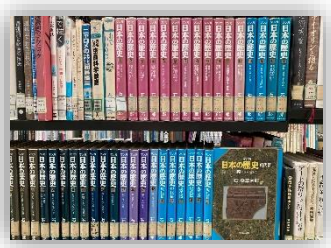
アンネとは第 2 次世界大戦時にドイツのナチスによるホロコースト犠牲者であるアンネフランクのことです。ユダヤ人であったアンネはナチスの迫害から逃れるため、隠れ家での生活を余儀なくされました。周りの人に気づかれてはいけないため、音を出してはいけない。トイレも流してはいけない。灯りもつけてはいけない。そんな過酷な状況下での生活を 1 人の少女アンネが「キティ」という架空の少女に語りかける形で日記にまとめていたものが戦後、世界各国で紹介されるようになりました。当時この本を読んでもらっていたときに（弟からしたら何のことかわからない話ではあったと思いますが）衝撃を受け、内容が気になりなかなか寝付けなかったことを覚えています。そして他の出版社からもアンネについての本が出ていると知り、なぜ隠れ家生活をしなければいけなかったのか。なぜユダヤ人が迫害に遭っていたのか。当時の状況について詳しく知り

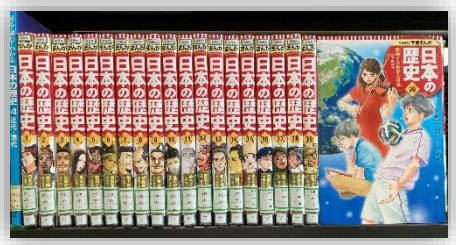
たいと思い図書館で本を借りていました。その中でアンネのことのみならず、ヨーロッパの国の位置関係や、当時の歴史、各国の動き等、学校の授業だけでは学べなかった部分も学習することができました。また、特別な読み方をする漢字とも出会い、難読漢字等を知っていくきっかけにもなりました。（その影響からか卒業文集でついていたあだ名は「歩く漢字辞典」でした。）

　昨今、電子機器も普及し、身の回りに様々な娯楽や学習道具が溢れています。本や小説等は娯楽と学習、両方を兼ね備えた媒体の１つであると考えます。自分が興味のある分野、あるいは著名な作品でもなんでも構いません。１度本を手にとってみると新たに見えてくるものもあるのではないでしょうか。

←（左）アンネ・フランク『アンネの日記』
配架場所：書架番号 30
資料番号：949.3||Fra
（右）小川洋子『アンネ・フランクの記憶』
配架場所：書架番号 2
資料番号：210.76||ｵｶﾞ||61722

（上）中央公論社『日本の歴史』全 48 巻　→
配架場所：書架番号 17
資料番号：726.1||ｲｼﾉ||
（下）集英社『日本の歴史』シリーズ全 20 巻
配架場所：書架番号 2
資料番号：210||ﾆﾎﾝ||





久保田先生も没頭された日本の歴史漫画。
図書館には中央公論社と集英社のシリーズがあります。中央公論社のシリーズは石ノ森章太郎が、集英社の表紙は人気漫画家が手がけています。

私の数学の本とのかかわり方

一般科目理科（数学）　東根　一樹

はじめまして。令和５年４月に着任しました一般科目理科（数学）の東根一樹と申します。昨年度まで山形大学で数学の研究を行っており、ここ数年数学の専門書や論文を読み漁る日々でした。このような状況でしたので、だいぶ内容が偏ったものとはなりますが、私のこれまでの「数学の本との関わり方」について、専門書と、一般向けの書籍・雑誌に分けて簡単に述べさせていただきたいと思います。

まず、数学の専門書についてですが、数学の専門書は（本当に自分の血肉にしたい場合は）読み進められるのが１日に１行だけ、全く読み進められない、なんてことがあると思います。専門書に書いてある内容を論理的に一分の隙もなく理解し、その一方で自分なりの直感的なイメージを得る必要があるからです。１日中ああでもないこうでもないと考え、分かったと思って次に進んでみたら結局「自分は何もわかっていなかった」ということがわかる。数学の専門書を読んでいると、こうした日々との闘いとなります。多少なりとも歩みを進められているうちはよいのですが、全く進めなくなるときもあります。

上記のように専門書などに疲れてしまったとき、私は一般の方向けの数学の本や雑誌を読んでいます。例えば、日本評論社から毎月出版される「数学セミナー」という数学に関する雑誌があります。数学セミナーには毎月何かしら特集が組んであり、その内容に精通した方々がわかりやすい原稿を書いてくれています。（ちなみにこの原稿を書いているときの特集は「数学オリンピックを愉しむ」でした。）もちろん、細部までしっかり理解しようとすると大変なのですが、内容を概観するような読み方をすることでとてもリフレッシュすることができます。また、何号かにわたる連載記事もあり、毎月の記事が楽しみになることもあります。さらに、毎月「エレガントな解答をもとむ」と題して問題が出題されています。解答を編集部に送り正解すれば名前が掲載されます。（私はきちんと解けたことはあまりありませんし、解答を編集部に送ったこともありませんが...。）他の多くの方とは違う視点での解答であったり、解答に独自の発想が含まれたりしていると、雑誌上で解答が紹介されます。問題は高校生でも理解できるものが多いです。もしよければ、どなたか挑戦してみてください。

手にとって本を読むということ

一般科目文科（哲学）　高畑　菜子

私の地元にある本屋のブックカバーには、盛岡の中心街の地図とともに、こんな言葉が書かれています。「わたしは、わたしの住む街を愛したい、手あかにまみれた一冊の本のように。」

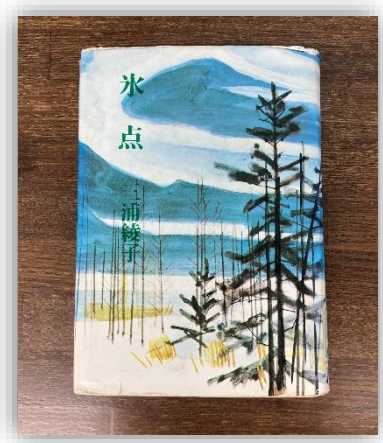
今、自分の研究室にある本を見渡してみても、手あかにまみれるほど汚れている本は、ほとんどありません。というのも、近年、研究関係の本や論文は、ほとんど PDF にしてパソコン画面で読んでおり、本を開いて読むということが少なくなってしまったからです。確かに、以前のように重い本を何冊も持ち歩かなくても、パソコンのなかに必要なデータがすべてあるというのは、非常に便利です。こうした PDF 化して読んだもとの本は、新品のように綺麗な状態を保ったまま本棚に並んでいますが、それらの本を見ても、その内容は覚えていても、特に感慨が湧くということはありません。

それに対して、茶色く黄ばんだ本は、自分で見ても薄汚れているなぁと思いますが、何とも言えない愛着があります。中学生のときにはまって繰り返し読んだ三浦綾子の『氷点』には、チョコレートの染みのようなものがあります。今の自分ならば何か食べながら本を読むということは絶対にしませんが、当時は続きが気になって、おやつを食べながらでも読み続けていたのだと思います。大学時代に帰省時の新幹線やバスのなかで読んでいた推理小説は、カバーが擦り切れ角が少し潰れています。疲れていたために途中で寝てしまい、手から滑り落ちてしまったからです。絶版だから大事にしていた研究書には、修士論文を書くときに眠気覚ましで飲んだコーヒーの染みがあります。あとで染みに気付いたときは、だいぶショックを受けましたが、締め切りぎりぎりにならないようにという戒めになりました。

本を読むということは、それ自体が楽しいことです。今まで知らなかったことを知ったり本の世界に浸ったりするのは、本を読む醍醐味と言えるでしょう。しかし、それと同じくらい、本を手にとって開くということに価値があると私は考えています。紙のにおい・手触り・染みや汚れといった本そのものが、思い出を呼び覚まし、懐かしい気持ちにさせてくれることがあります。大袈裟かもしれませんが、手あかにまみれた本に、私の記憶が刻まれているのです。こうした感覚

は、電子書籍などでは味わえないものだと思います。

今、皆さんが読んでいる本は、これからの長い人生のなかで、読んだことすら忘れてしまうものかもしれません。しかし、何気なくもう一度手にとったとき、本を読んだときの気持ちや都城高専で過ごした日々が思い出されるのではないでしょうか。学生の皆さんにとって、いつか「手あかにまみれた一冊」になるような本との出会いがあることを願っています。



←三浦綾子『氷点』

配架場所：専門・教養図書
請求記号：913.6||ミウラ
人間の「原罪」と「赦し」をテーマにした三浦綾子の代表作。国内はもとより、韓国や台湾でも映像化されています。

石川啄木と若山牧水→

高畑先生の地元である盛岡市は、歌人　石川啄木の出身地。宮崎県の歌人と言えば若山牧水。啄木と牧水は年齢が１歳違いで友人同士。啄木が２６歳の若さで亡くなる際、啄木の家族とともに彼を看取ったのが牧水でした。

BOOK HUNTING 2023

今年も宮崎市内の書店にてブックハンティングを実施することができました。

【活動の目的】
学生のニーズに即した書籍を直接購入し、本校図書館の学生用図書の更なる充実を図ること、併せて学生図書委員が多くの新刊の書籍に触れることを通じて、書籍に対する知識・見聞を深めること。

2023 年 6 月 10 日(土)、13 名の図書委員が蔦屋書店 宮崎高千穂通りにてブックハンティングを行いました。委員全員で店内を隅々まで歩き回り、悩みながら迷いながら 123 冊の本を選びました。どうぞ図書館で手に取ってご覧ください。

参加した図書委員と店内にて。
当日は定期試験明け直後にもかかわらず
皆さん懸命に選書してくださいました。
選書した本と一緒に。

ブックハンティング書架
カウンターの向かい側中央にあります。

BOOK REVIEW
from　BOOK HUNTING 2023

奥野修司『死者の告白　―30 人に憑依された女性の記録』

＜あの世とこの世の狭間の世界＞

宮城県の古刹・通大寺では、人間に「憑依」した死者を成仏させる「除霊」の儀式が、今もひっそりと行われている。震災後、30 人を超える霊に憑かれた 20 代女性と、その魂を死者が行くべき場所に送った金田諦應住職。彼女の憑依体験から除霊の儀式まで、一部始終を、描く。

震災のすさまじさ、津波や事故で死ぬこととはどういうことなのか。除霊については二度殺す事といっているが、あの世とは本来私たちの故郷。執着があるからこの世に留まるのであり、除霊とはその執着を殺し解放させることだと私は思います。だから、私たちは毎日を込めて生きなければ、大切に生きなければならないのだろうと思う。除霊に本書では説得、という方法を用いているがそれは生きている人霊のカウンセリングも同じことで執着を手放すこと。津波で亡くなった方がどんな苦しみで亡くなったのか、これを読んで身震いしました。無念の死をとげた家族が、苦しい闇を彷徨うことなく光の世界に行けることをただひたすら祈って供養する。遺族が何をするべきかも教えてくれました。

はやみねかおる『奇譚ルーム』

私が中学生の頃に読んだ本ですが、今でも記憶に残っているくらい面白い一冊です。

インターネット上でのやり取りで物語が進んでいくのですが、それにならって文章もチャットのような形式で書かれています。

手軽に読めるので隙間時間のお供に読んでみてください。

知念実希人『ヨモツイクサ』

物事は、その人から見た真実とは限らない。いろいろな視点から物事を見ていけば、違った真実が見えてくるし、その真実さえ真実かはわからない。そのような”真実”を、いつも、彼は教えてくれる。いや、押し付けてくる。現役の医者であ

りながら、執筆活動を続ける彼は、医者の内側から、不可解な事柄の真実を描く、小説を書く。

今回のブックハンティングで、選書した「ヨモツイクサ」は、アイヌの神話と、医学で描く、作者が初挑戦となる本格バイオホラーだ。神話の点からカルトホラーを医学的に仮説する新感覚ホラー作品。作者は知念実希人だ。

杉井光『世界でいちばん透きとおった物語』

＜感動を「　　」＞

読み終えて残ったのは感動で満たされた心です。この本は正直に言うと話の中間がつまらなく感想文を書くために仕方なく読んでいました。（個人の感想です）ですが、物語の真相が分かった瞬間胸が熱くなりました。

本を読み進めていく中で蓄えた知識によってカラクリが解け、私は最初のページに 1 度戻りました。最初見た時とは違うものが見えてきます。中間のお話もこの感動のためにあったのだと気づきました。

あなたは「　　」に隠された意味を知ることが出来るでしょうか。

この本の面白さは他の小説とは異なるように思います！ぜひ皆さんにも読んでいただきたいです。

セネカ『生の短さについて』

＜セネカの説く生の短さについて＞

生は浪費すれば短いが、活用すれば十分に長いと説く『生の短さについて』。心の平静を得るためにはどうすればよいかを説く『心の平静について』。快楽ではなく徳こそが善であり、幸福のための必要十分条件だと説く『幸福な生について』。私たちが生きているこの世の中で、私 1 人が生きていられる時間は有限で長く感じるも短く感じるも 1 日 1 日 1 分 1 秒が私自身の選択だと思います。この本だけでなく、いくつか哲学者の書籍をブックハンティングで図書館に入れておりますので、少し難しい分野にはなってきますが、興味があれば是非手に取ってみてください！

早見和真『ザ・ロイヤルファミリー』

＜ザ・ロイヤルファミリーを読んで感じたこと＞

私がこの本を読んで感じたことは間違いなく面白かったです。本作は馬を主人公においたお話で、一部と二部で構成されていました。では、話の内容を簡単

にまとめていきます。

［一部］

主人公のクリスは税理士で、税理士の父を亡くし落ち込んでいたが、たまたま正月の神社で同級生に会い、競馬に誘われてテレビで競馬を観戦することに。直感で良いなと思った馬が二頭いて、それを同級生に電話で伝えると的中し、その馬券が 3 万円から 428 万円に大化けしました。そして山王耕造の会社に就職。後にクリスは山王耕造の社長秘書になります。山王耕造は破天荒な性格で、同じ関係者からもあまり良い印象は持たれてはいません。そこで出会う数々の馬たちの中でも一際思い入れの深い馬が出てきます。それがロイヤルホープという馬です。

［二部］

ロイヤルホープが引退し、亡き山王耕造のあとにクリスが支えるのは、山王耕造の息子である大学生の耕一です。耕一は大学生ながら特別馬主になります。そして耕一に託された馬は父親がロイヤルホープ、母親がロイヤルハピネスです。クリスも年を重ね、ようやく結婚や周囲の環境も少しずつ移り変わりながら、馬主のマネージャーとしての物語はまだ続いていきます。山王耕造のライバルだった椎名の息子も出てきて、マネージャーになります。様々な苦難や重賞レースを乗り越えて、最後の有馬記念に臨みます。伝説のような熱い勝負を残し物語は幕を下ろします。

今村昌弘『兇人邸の殺人』

この本は、今村昌弘さんの『屍人荘の殺人』シリーズの３作品目で、舞台は“廃墟テーマパーク”にそびえる「兇人邸」です。「兇人邸」には、首斬り殺人鬼が待ち構えており、次々と犠牲者があらわれます。しかし、生存者たちは屋敷からの脱出の道を選べない状況で、別の殺人者がいる可能性も浮上してきます。殺人者がだれで、結末はどうなるのか、屋敷の見取り図もあるのでそれを見ながら読むともっと面白いです。２作品目ともつながっているところもあり、殺人者も全然予想がつかなくて最後の一行まで面白いです。

トピックス

４年ぶりの全面開館となりました

　コロナ禍で長らくの間、休館または一部開館が続いていましたが、今年度より外部の方への開放も再開し、ようやく全面開館となりました。実は、図書館リニューアル後初の全面開館です。近隣の図書館や中学校にも図書館開放のお知らせをし、先日開催されたオープンキャンパスでも、参加者の方々にも案内をさせてもらいました。学内・学外を問わず、多くの方々に本校図書館を利用してもらい、新たな本との出会いやたくさんの学びの機会を提供できますと、大変うれしいことです。

オープンキャンパスにて配付した案内。制作は2A 図書委員 郭龍佑さん。

編集後記

〇今年は多くの本をブックハンティングできて、専門書に限らずさまざまなジャンルの書籍を図書館に入れることができたので、より充実した内容を皆さまにご提供できることができてとても嬉しく思っています。また、古い専門書の入れ替えも行いましたので、レポート等の参考文献としても幅広く使用していただけるのではないかと思っています。これからも、多くの方々に図書館を利用していただけるよう図書委員として尽力していきたいと思いますので、何卒お力添えの方よろしくお願いいたします。　（５M 福元菜瑠）

〇私が前期の間図書委員の活動をする上で一番楽しかったのは本の更新作業です。古い本は、情報が古くなるので、更新作業を行うことで達成感を味わうことができました。
（５E 河野太翼）

〇図書委員になってから本に関わる機会が増え、今まですっかり忘れていた本を読む楽しさを再度感じることが出来ました。図書委員になれて良かったと感じています！
（５C 新屋志依）

〇図書委員会に入り、小さい頃から好きだった本に関わることができて幸せでした。高専の図書館を利用する方々の役に立つような本を選んで購入したので、一冊でもいいのでぜひ読んでください。　（５A 黒木李央）

〇今回のブックハンティングについて、図書館の本を選書するという貴重な体験を出来たことがと ても楽しく、充実したものであったと考えています。私は、本が好きで図書館が好きだったので、 図書委員会に入りました。私個人としても、今回のブックハンティングはとても楽しみなものであ り、実際に楽しむことができました。沢山のジャンルの本が揃っているので、ぜひ皆さんにも読ん でもらいたいと思っています。　（１C 久保楼生）

〇ブックハンティングは、たくさんの本を実際の目で見て、手に取って選ぶことができてすごく楽しかったです。はじめて見る本がたくさんあって、いろいろな普段みることのないようなジャンルの本とかも見れてすごく貴重な体験になりました。　（１A 當瀬瑞歩）